

〈女と男〉のミニ雑誌〈あごらミニ〉●何でも言える

●何でも書ける●小さな〈ひろば〉=AGORA・〈あごら〉

●あなたの声を待ってます。みんなてつくる〈あごら〉

あごら

MINI 〈35号〉
1980年1月10日発行 ¥100 丁25

出産を考える②

ミニ32号で私たちは現在の病院での出産を考え、もつと自分たちに納得のいく出産をしたいと願いました。その方向性を探りながら、今号はいろいろな出産の体験談を集めてみました。

◆夫が立ち会った病院での出産 ◆「暴力なき出産」の実践を目ざした自宅出産 ◆「自然にまかせて出産を楽しむ」と呼びかけている自宅出産 ◆ラマーズ法を取り入れた助産所での出産など。

新しい出産のかたちの一つといわれるラマーズ法は夫婦そろってお産の生理、呼吸法などを学び、分娩に夫が立ち会って協力するのが原則。新しい施設のなかで安全を見守ってもらいつつ産むけれど、医師・助産婦は必要最小限度の介助だけという、夫婦の主體的な出産法です。日本では東京の三森助産院がラマーズ法を取り入れています。一方「暴力なき出産」(ルボワイエール著、村松博雄訳、KKベストセラーズ社)は、機能主義にかたよりがちな近代医学を批判し、分娩室のまぶしい照明と鋭い金属音・人声などへの驚きから新生児が恐怖にひきつった泣き声を出すことなく誕生できるように、赤ちゃんへの「暴力」の

排除を提唱。万一に備えて近代的整備をしたうえで、赤ちゃんにふさわしい分娩室の雰囲気作りとして、薄暗がりと沈黙を守ります。娩出の後はヘソの緒をつけたまま赤ちゃんを母親のおなかの上にしばらくのせておいてあげます。(これはラマーズ法も同じ)。日本では故村松氏の後継者斉藤博氏が「超自然分娩」と呼んで夫の参加を勧めつつこの出産を実践しています。(斉藤産婦人科の出産体験談は載せることができませんでしたが)



小さな情報提供ですが、共にこれからの出産を考えあいたいと思います。

今月のなかみ

〈あごら札幌編集〉

表紙のことば	出産を考える②	山口 里子	1
カット			
体験談集	夫が立ち会った病院出産・自宅出産①		2
	自宅出産②・ラマーズ法出産		
	文責・加藤てい子・坂本 典子・高橋 芳恵・細田英理子		
	松平 明美・餅田 裕子・山口 里子		
意 見	出産を女と子と男を結ぶ地平へ		6
お知らせ	あごらミニのミニあごら		7
	女のつどい・女の講座		8

自分を変えよう!

アサーティブ・トレーニングを

1月から始めます

好評のアサーティブ・トレーニング(自己変革の一手段)を、1月16日から再開します。ご希望の方は、お早目にお申し込みを!

●毎週水曜(午後クラスと夜間クラスあり)

●講師 河野貴代美さん
毎週一回で全10回。受講料は10回で1万円(あごら会員は6千円)

●〒160東京都新宿区新宿1の9の6「あごら可能性教室」へ、昼夜の別を記入、ハガキで申し込みを。

『お産の学校』

「私たちが創った三森ラマーズ法」やっと思えました。これは単なる自然分娩の解説書ではありません。新しいいのちをどう迎えるか、人間の尊重・女の解放の原点に迫る本だと思います。B6判200頁 1000円

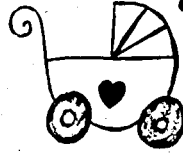
高橋ますみさん

『主婦が歩き出すとき』を出版
胸に沁みる感動の記録です。ぜひ一読を! B6判三六〇頁 1500円

〒160 東京都新宿区新宿1の9の6
BOC出版部

夫が立ち会った病院出産

みんなにも 味わってもらいたい
あの感激!



草野隆⁽³⁴⁾と和子⁽²⁷⁾

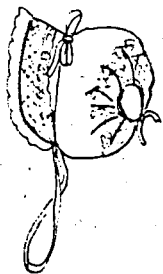
体験談集

Q 出産に立ち会うことになった動機は。
K 自分たちの子供が生まれるところを二人でみていきたいと私が言い出しました。子供にも「ここで生まれたのよ」と教えたかったので最初は自宅分娩を望ん

でました。ただ初めての子供だし、万一の時の不安もあり、出産に立ち会ってもらうことにして、病院出産にしました。
T 最初は僕がのせられてしまった感じでも生まれてくるのは二人の子供、作る時も二人だから、生まれてくる時にそばにいたいというのも自然で正論だと思いい、出産に立ち会うことを約束しました。出産について勉強したり、親戚で実際に起きた異常出産の経験を知りたりして、ますます生まれてくるころを自分の目で確かめたいと思うようになりましたね。
Q ことわられた病院などは。
T 何軒でも捜そうと思っていたけど、最初に行った病院ですぐOKが出たのは非常にラッキーだったと思います。
Q 抵抗とか周りの人の反対は。
T 自分自身抵抗はありました。けれど自分の子供が生まれるというのは大事だと思いい、真剣に取り組みたいと思ったんです。でも母なんかはトシなので、「男が女の領分に入っていくなんて気がいいじゃないか」と言ったり。
K 分娩室に入るのを止めようとしたらしいですよ。病院のほうはすんなりで「特別な勉強を」とも言われなかったです。
T 友達と話したりしても、外でオロオロしているより中で一緒に頑張ったほうがずっと男らしいと言ってくれましたね。反対の人がいても、僕の意見を聞くと最後には必ず僕の意見がとおった。皆も、できれば出産に立ち会いたい、立ち会いたかったと思っているのではなかろうか。
Q 出産に立ち会って初めての感想は。
T 正直なところ立ち会わなくてもよい

のなら立ち会いたくない。つらいもの。産む本人もつらいと思うけど、つきあっていけるほうも苦しかった。でもいろいろなことを考えたら、立ち会ったのが一番だと思いい。なかなかでてこなくて生まれる瞬間ボーンと落ちてくる、あの時の感激はすごくて、その気持ちは皆にも味わってもらいたい。そのあとの子供に対する気持ちはがうんじやないかな。あとから「生まれたよ」って聞くのとはね。
K 私はそばにいてくれて、すごく心強かったですよ。こちらがいきむ時も、ずっと手を握ってくれているので安心して頑張ることができました。見られて恥ずかしいとは全く思いませんでした。
Q 病院でつれあいの入室をことわる理由の中に、オロオロするとか気分が悪くなるのでは困るというのがあるのですか。
T 今まで味わったことのないような異様な雰囲気とその威圧感・緊張感は相当なものだった。機械と一緒に大事な女房がモノのようにおかれているという圧力はあったけど、気持ちが悪いとかオロオロするということはなかった。皆と気持ち一つになり、早く生まれて欲しいの一心で、それどころじゃありませんよ。
Q 立ち会ったことによる子供へのかわり方の影響は。
K 私からみると一生懸命。
T 子供に接している時も、立ち会ったことは常に頭にありますね。特に思い出すのは生まれた瞬間。頭がでて、左目がチョットあいて、オレを見たんじゃないか? 最初に会ったのはオレだなんてね。K 婦長さんと産湯をつかわせたりした

わね。時間さえあれば子供と一緒に。夜中には私のかわりに起きてくれたり。
T 男は育児から逃げようと思うといくらでも逃げられる状態だと思う。本音は逃げたいよ。大変なもの。でもあえてできるだけ育児に参加しようと思ったね。ベタベタするのではなくてね。子供を作る時だって二人なんだから。これが大事だとなんと無理してでも頑張ってしまう。
Q 次の出産はどうしますか。
K 自宅分娩が不安で病院出産をしたんですが、二度目からは自宅だと思いいます。正常分娩だったので、先生は会陰を切ったりあとの処置だけでしょ。それに病院のつめたい感じがいやでした。
Q アンケートをとった中では、その病院は非常に雰囲気も良く權威主義的でもないし、恵まれた環境だと思えるのですが。
K そう、ただ設備的な面でのあの分娩室のつめたさを言うのです。音楽など流すと良いのに。陣痛促進剤も使いました。
K 会陰切開も「切りますよ」っていわれて、ああいう状態でイヤって言えませんがね。これらのことを経験してみても自然に産みたいと思いいです。
T 今回の経験でこんどは自分でとりあげてやろうというくらいに度胸もついたら、彼女もしつかりしていれば自宅出産もできると思いいいます。



自宅出産①

うれしい お産だったな〜



東 由佳子⁽²⁷⁾ & 龍夫⁽²⁷⁾

へ由佳子さんにインタビュー

Q 自宅出産しようと思ったのは、どういう理由からですか。

Y 私は出産を自分の生き方として考えていました。自宅出産することより、良い医者を見つけたら悪い医者をバツンしていくほうが、多くの女たちの力になると思います。で、まず病院に行ってみただけとやっぱり医者に自分のからだのことを具体的に話していけないという感じがあって、自宅出産をしたんです。

Q 自分の生き方と自宅出産がどうつながるのか、もっと詳しく話してください。
Y 最初の子供は、当時五百四十分娩といわれた福祉出産を利用して愛育助産院で産みました。食事がとても良くて助産婦さんがすごく良い印象だったのに、産む

時には一人で放置されたり、陣痛後期の興奮状態でおしっこをちびつたらすごく怒られたりして委縮してしまいました。悲しく、おっかなく、冷たい感触でした。

Q 性に関することは、出産も含めて、知らないことが多くて、だからよけい冷たく怖しく感じるんですよね。

Y 私は、今度は子供の父親である自分の好きな人と一緒に出産したいと思って、いたところ、子宮内膜の病気でソウハすることになりました。妊娠中絶手術と全く同じことをするので、これは男にも見えてもらいたいと思って、東君に立ち会ってもらいました。

Q よく病院でOKしましたね。

Y 医学部の学生と偽ったら、すぐOKでした。それで中絶とはどういうものか彼も感覚としてわかったのです。すごく乱暴に感じて貧血をおこしたそうですが、そのことで、子供を産むということに関して自覚が高まって、出産も一緒にという気持ちに自然になりました。

Q そうして実際にどうでした？

Y 妊娠してから「子宮みを自分たちの手に取りもどす会」のパンフ、野口体操の本などを見て、腹式呼吸や体操、「ラマーズ法」の練習したり、積極的にとりくみたいと思ったの。そして「暴力なき出産」を読んで、「これをやろう！」ということになりました。朝十時ごろ陣痛がきたので友人の看護婦に連絡し、洗濯、掃除、昼食をしました。お産は病気ではないし、普通の生活の流れの中でやりたかったのです。呼吸法というのは本当に楽になります。あと、偷気というの

が良かった。東君に精神統一してもらって手を痛いところにあててもらったの。妊娠中、この偷気で痛みがとれるんです。妊娠中でも疲れてお腹が張る時にしてもらったら楽になりました。陣痛の時も偷気をする、来てるなっていう感覚はあるけど、痛いのとはちがっているんです。夕方そろそろいきみたいと思ったの。

それで横になっていきんだら最初のいきみで頭が出てしまいました。あわてて電気を消したりしてかなりバタバタしたところはおつたけど、精神的にはゆとりがありました。そして三回目のいきみで赤ちゃんが出てしまったんです。一回おぎやあと泣いたきり、すぐおなかの上のせてあげるとピタッとくっついて、指をチュチュと吸っていました。とてもかわいかった。一時間半ぐらいそのままにしてからへその緒を切りました。

Q 立ち会った人は何人でした？

Y 自宅と同じ建物の仕事場の人二人と友人の看護婦とで、結局三人でした。東君が上の子を保育所に迎えに行っているほんの三十分ぐらいの間に思いがけなく早く生まれちゃって、取りあげてもらえなかった。とても残念がっていました。

生まれて十分ぐらいして東君が帰ってきたので、静かなほうが良いからと少しして皆は帰りました。だからへその緒を切ったり産湯につかわせたのは東君です。

Q もし万が一、異常が起きたらとか、緊急時のことはどう考えていましたか。

Y 妊娠中に一度産婆さんの検診を受け、妊娠中も何かおかしかったら病院に行こうと思っていた。体が素直に反応し

てくれたから、調子を知るのには自信がありました。お産が重い時は事前に自分でわかると思うの。友人は、妊娠中も腰痛がひどく、出産の時もあり痛みがひどいので病院につれていったら、ベッドが空いてるのに、予約していないからと断られたの。結局彼女は助産院で産みました。ほかにも自宅で産んで、首にまわりついたヒモをほどきながら取り出したり、わきの下に手を入れて引っぱり出したり、三日もかかった人もあるけど、自宅でも良かったって言ってますよ。病院だと人工的な処置をされてしまうでしょう。時間がかかろうと痛かろうと、本人や周りがおかしいと思わない限りは心配しないんです。それは個人差でしょうから。

Q 妊娠中に順調な人が突然大出血してすぐ輸血が必要というようなことが出産にはあるといいますね。そんなことは心配しませんでしたか。

Y 私の場合はすごく自信があつて不安感がなかったんです。信頼できる助産婦さんを見つけていましたし。でも、もしもの時にかけこめる病院は確保しておいたほうがよいのは当然ですね。

Q 助産院は緊急時に病院に運びこむ体制をとっているようだから、よい助産婦さん確保しておくといひですね。そのほかいま病院での出産に疑問をもっている女たちに伝えたいことはありますか。
Y 病院への不信の大きな原因は看護婦さんの報告によるんです。医師の都合で人工的な処置をした例をいっぱい聞いて、恐ろしいと思いました。自宅分娩で子供をすぐおなかにのせた時、赤ちゃんを産

んだんだなって強く実感できて、とてもかわいらしくて優しい気持ちになれました。いま思い出しても、最初の助産院での出産は恐ろしいだけの印象で、自宅出産は楽しい出産だったなあって、嬉しい感激がツーンと心によみがえってくるんです。さあみんな自宅出産しましょうと言いたいわけではないけれど、病院で産んでも、せめて言いたいことを安心して言えて、身近な人がそばにいたら不安感も少なくなると思いますよ。

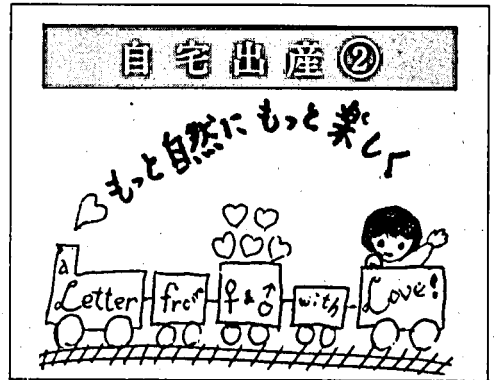
Q 本場にそうですね。

へ龍夫くん、インタビュー

Q 東君、どんな準備をしましたか？

T 用意したのは煮沸消毒したハサミ・木綿糸・ガーゼ・パンソコ・逆性石ケン液(オスパン)・手のひら大に切った綿花・秒針付きの時計・体重計・ベビーバスにお湯と温度計。あとは丁字帯や赤ちゃんの産着などです。ウチはベッドなので古い布団にビニールを敷いて古いシーツをかけました。出血するので持ててもよいように。胎盤を入れるビニール袋としてゴミ袋。あとイキむ時つかめるようにベッドの柱にヒモをつけたけど、使いませんでした。人が頭のほうにいて手を握ってあげるほうがよかったから。立ち会った人は爪を切りブラシを使って消毒液で手を洗いぬいに洗いました。

部屋は豆電球をつけて、隣の部屋のあかりがもれるようにし、産湯につける時に明るくしました。温度には気をつかって、母胎内温度に近いということとで38度ぐらだったと思います。



女—まだ見ぬあなたに心をこめてお便りします。平常、分娩の際は病院で医師の介添をもつて出産するのが一般的ですが、それをしないことは、今日では何か大きな勇気の伴うことと考えがちです。しかし今日までの数千年間、幾百万の人々は、自然な正常な分娩をしてきました。自宅出産を望むあなたに私の出産の時のようすをお知らせしたいと思います。ほんの一例にすぎないと思いますが、参考にしてみてください。

*

「あれっ何かおなかが痛いよー」お産の始まりです。お産はエネルギーをたくさん使う仕事だから、無理しても食べておきます。いたみが強くなり、私が横になっている間に、父親となる人は出産する部屋の準備をします。まずクレンジールでふきそうじ。ふとんを敷いて(古いもの)

その上に新聞紙・ビニールを重ねます。部屋の準備が整ったら、その部屋に移って横になります。部屋への出入りは少ないほうがよく、私の場合は、いきむまでは、子の父親だけそばにいてもらい、励ましたり腹をさすってもらったりしました。いい気持ちでしたよ。

いよいよ、いきむ時が来ました。……子宮頸に指が4本たてにすーっと入ったらか、目で見て10cmぐらい開いたらとかよくいいますが、いきむ時は、本人のいきみたくなつた時が最もいいみたいです。一番痛い最後の時、自然といきみたくなります。私の場合、その時まだ破水していません。破水してもいいです。破水しないうちにいきむと卵膜に入ってしまった赤ん坊が出てきて危険です。なぜなら出てきてから卵膜を破ると赤ん坊が最初の息を吸い込む時、水を飲んでしまうからなのです。……さあ、一回目のいきみです。力を入れる時は下腹へ。顔でいきんでもダメですよ。ウンコをするかんじで。アッ、頭だッ。一回いきむと少しの間のいきみがひきます。そしてまたすぐ痛くなります。痛くなつたら、はい、二回目のいきみです。ウーウー、ポコッ、アッ顔だッ。少し休んで。痛くなつたら、はい三回目。ウーウー、ツルッ。アッ、女だッ。この間、介助者は、会陰が裂けないようおさえています。

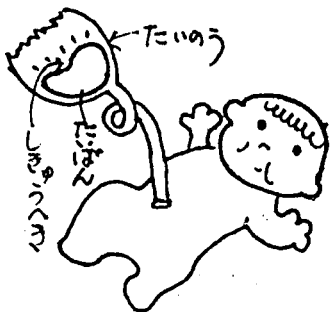
赤ちゃんが生まれたら、じゅうぶん暖かい状態にしてあげよう。産声を確かめる。泣かない時は、逆さにしてお尻をたたいたり、人工呼吸をする。鼻・耳・のどの水を吸い出し、きれいにふいてあげて後産です。だいたい二十分ぐらいたつて、いきみがきたら前と同じ要領でいきんでみます。胎盤や胎のうの一部が母体に残ると、熱を出したり他の病気のもとになるので、全部出たか念を入れて確かめる。その際、手はつめを切り、ほう酸・クレゾール等で消毒する。

次に、ヘソの緒の呼動が止まるのを待つて切ります。切り方は、ヘソから5cmと10cmのところを太いもめん糸で2、3回きつくし、ばり、熱湯消毒したカミソリで切ります。

*

男—これまで長い間、みんなが子供を産んできたんだから、自然にまかせれば大丈夫。父親になる人は、母親を安心させ自信をもたせてあげるように。不安が筋肉を緊張させ、痛みが増すようです。痛みを抵抗しないように、陣痛のリズムに乗る感じがですね。

ただ万一の場合にそなえてすぐに産婆さんや医者呼べるようにしておくこと。また事前に、さかこではないか、母体または子供に異常はないか、母子とも元気か



を看てもらい、理解ある人なら、自分たちでやりたいことを話して相談しておくのはよりよいでしょう。僕は最初の子の時は産院で分娩室に入れてもらい、お腹を押しながら見ていたから、だいたいの要領を知っていました。出産を体験するのはスゴイ旅です。男もこれを見逃がす

手はありません。新しい生命はすごいパワーをもって僕の中に入ってきました。そして女のがんばりにも尊敬させられました。こんなすごいのを立ち会わない法はないですよ。
男も女も出産を共に楽しみたい。
(札幌の一會員にきた手紙より抜萃)

——ラマーズ法——

『お産の学校』(BCC出版)から抜萃



ラマーズ法体験談1

暴力的出産を避けられて ホントにしあわせ!

友人が、初めてのお産を病院でしたときに、陣痛室に一人ぼっちでまる一日(夜も)置かれた話や、会陰をすんでのところまで切られる話を聞いて、そんな「非人間的」な妊婦の処置や、簡単に切ったり、薬を使ったりすることのないお産がいいなあと考えていたものでした。

今度、初めて妊娠して、最初のうちはどこでそんな望むようなお産ができるのか知らないまま、母親学級で教わった腹式呼吸や体操をよく練習して少しでも軽なお産をしようとしていました。ところが新聞で三森助産院の記事を読み、夫が必ず介助すること、子どもが血にまみれない自然の姿で生まれてくること等を知って、これはすばらしいと思いました。とにかくいっぺん行ってみようと思ひ、講習会に出席しました。七か月に入っ

ていましたが、これからでも大丈夫なことに、年齢のことも気にしないでいいことと、体操や呼吸法など誰にでもすぐできることだとわかり、ここでやってみようと思つたわけです。なによりも、自分自身で意識をはっきり持ちながら積極的にお産するという意思が身体にふきこまれて、背すじがピンとする思いがしたので覚えています。

初めて出産のビデオを見たときの感動は、今度自分の子が生まれたとき以上の強いものでした。人間が生まれ、はじめて地上に出て呼吸をし、生きようともがいているような赤ん坊の姿に、涙があふれました。夫にもそんな話をしながら体操や呼吸法など二人でやってみたりしました。しかし「万一の場合、病院でないとおぶない」という声に代表される周りの心配で、まだしばらく迷いがあつたのも事実です。けれども妊娠月数がすすむうちに、私の気持ちも夫の気持ちも決まり、周りをなんとか説得し、あとはごく平静に出産を待つことができました。

予定日が二週間すぎても生まれないという事態になって少しイライラしましたが、十六日目の朝、しるしがあり、その夜十二時ごろ、車でのりつけて、分娩台のつてから二時間余りでスピード出産しました。いきみの前の二時間ほどは、非常につらく感じましたが、いきみはうまくいって、一時間くらいで自分でも驚くほど早くグイグイグイグと子どもがすべり出てきたときには「わあ、生まれた。ホントだ不思議だなあ」と声をあげてしまいました。こんなふうにお産の経過を一部始終、自分ではっきりと知り見たということは貴重なことだと、いましみじみ思っています。予定日が休日だからと前日強制入院させられて、クスリで陣痛をつけられて出産した話や、なかなか子供が出てこないといつて、おなかに医師が乗って押し出そうとして母子ともに大変なことになったという、信じられない話を聞くにつけ、出産という女のハレの体験を、すべての女がもっと健康に、積極的に、産む側・子どもの側に「奪いとって」いかなければならないのではないかと感じます。そうしたことが、これからの私のような「子づれ女」の生きる行末をもつよく支えてくれるだろうことを願ひつつ……。

ラマーズ法体験談2

両側卵巣腫瘍手術の身で

三年ほど前に両側卵巣腫瘍の手術をうけ、少しずつの卵巣を残せたものの、出産のときは大病院で「安全に」産むよう

にしなければ無理なのではないかと思っていました。ところが友人たちのお産の話を聞くにつれ「安全に」の意味がぐらつきだし、ほんとに「安全に」産みたい、つれあいぐらいいは女性の身体について理解をもつてほしいと思うようになっていました。

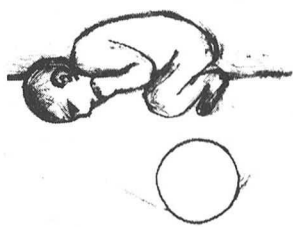
偶然三森さんのことを知り、講習に参加したのは、妊娠七か月のときでした。「遠すぎる」「手術しているのだから大病院のほうがよい」等々、いろいろな意見に気持ちが揺れていたのも事実ですが、何とか出産までこぎつけました。破水・しるし・陣痛と三拍子同時に来ましたが、意外に落ち着いて、一人でボストンバッグをもって、電車・バスを乗りついで(助産院に)着き、外へ食事にも出かけられました。どうにか呼吸法で全開大までこぎつけたまではよかったのですが、いきみのときの腰痛にだいいぶネをあげて……。もしこれが普通の病院で足を固定されていたらと思うとゾッとします。

出産後、お乳がはつてきたとき、乳首が小さいことと我が息子がお乳を飲むのがヘタッピーのため、どうしてよいか一人で悩んでいました。三森さんの「大丈夫だよ、ほかの赤ちゃんに飲んでもらえばいいよ」の一言で気分がはれ、吸引力バッグの女の子の「口助け」でなんとかのりきれそうです。

三森さんと話をしていると、出産にしろ育児にしろ、途方もない特別なことではないのだから、適切な処置さえすれば、あせらないでちゃんとできるという感じがします。

——出産を女と子と男を結ぶ地平へ——

加 藤 てい子



「産」という人間にとつての根源的な問題は、30年ほど前までは、助産婦の介助によって行なわれる自宅出産であつた。戦後わずかの間にそれは近代産科学を基調とする病院出産へと移行し、急速に医師の手にゆだねられていった。と同時に、母子の生命の安全管理を第一として、肉親は「産の場」から完全にしめ出されていった。産婦は近代産科学の粋を集めた産院で、冷やかな感触の機械にとり囲まれ、ひとり分娩台に固定される。密室の分娩場で隔離された産とともに、過剰な人工的操作が産婦と子に加えられるとすれば、私たちは母子の生命の安全管理とひきかえに、多くの失ったものがあるのではないだろうか。

■産む側にとつての産であつたか？

自宅出産の時代、その営みは少くとも私たちの目や手で触れられるところには在つたはずだ。が、それとても本当に産む側にとつての産であつたかという、長い間白不浄とされた歴史をみても、そうとはいえない。現代においては、産科医学を習得した専門家の手で、産むというよりは産ませられるといったほうがよいような状態である。とすれば、昔も今も産む主体にとつての産というのは、はたしてあつたのだろうか。生のトータルな姿として産や性があるはずなのに、タブー視されたり、神聖化されたり、あるいはほとんど卑しめられたりといった姿である。

■新たな産の共有を

そうしたありように疑問を持ち、あるいは否定して、産を自らの手に取りもどそうとする動きが起こつたのはそんなに古い時期ではない。それは女性解放の波とともに、一九六〇年後半から七〇年にかけて、まだ始まつたばかりである。失われたものとの出会いを、その自然回帰に求め、はるか遠くなつた母たちの時代をたぐり寄せつとも、新たな産の共有を女たちや男たちとわかちあいたいと模索され試みられてきた。仲間たちとともに行われる「自宅出産」、あるいは、夫も共に産の場に在り、薬を使用しない産痛からの解放を志向した「ラマーズ式・無痛分娩法」、そして産痛からの解放を、産婦から子へもその視点をひろげた「暴力

なき出産」等、体験をわかちあひながらそれらは開始された。

性と産を分離して、女を娼と母に偏在させるありようを変えようのは、こうした産の場を女たちや男たちと共有しなげらなされるものと確信するが、道はまだ遠いといわねばならない。夫の参加はおろか、分娩室に立ち会うことさえできないのが現状である。

■病院会計上の異常!?

病院出産では、正常出産というのがほとんどないといわれるのはどういうことだろうか。新聞記事のルポ等を調べてみた。病院会計上の異常という聞きなれないことがでていた。つまり、病院では、いまや医者の常識とかで、陣痛促進剤を使用したり会陰切開を行なう。切開手術をすると、その部分だけ異常として医療保険が適用されることになるわけだ。かつて助産婦は、いかに会陰を切らないで産ませるかという会陰保護の技術を誇りとしてきたという。何らかの異常が認められたとき行なわれるはずの手術が、今は「ほうっておくと裂けるもの」のだから、あらかじめ切っておく」となり、しかもほとんどは産婦への事後承諾のしかちで行なわれる。かくして現代の産は、血まみれでうぶ声をあげることとなる。

■産の理想郷は

「ラマーズ法」では、会陰保護が施されるので、産まれる子は一滴の血もつかないという。それが本来的な赤子の姿であるだろう。また「暴力なき出産」にして

も、なぜ今まで私たちは、このことに気づかなかつたのだろうかと思うほど、子にとって自然な方法が、とてもやさしいことばで語られている。人間を、時間の向こう側からこちら側に迎える誕生の時、少しでも苦痛や恐怖からとき放ち、深いねむりからのめざめを子に与えてあげたいと語られていた。産の理想郷ともいえる「暴力なき出産」を「ラマーズ法」のなかにとり入れたかたちの出産ができた。母と子とその父を結ぶ地平は姿をあらわすのではないかといった願いが私たちの中に在る。

個としての三者が、人間の原点として「生命を産む」という行為を共有しあえた時、はじめて各々の人間の解放は始まるのではないだろうか。

■問題の複雑さ

三十二号に続いて、今回も「へ出産を考える」というテーマで、「自宅出産」、「ラマーズ法」、「暴力なき出産」を探ってみた。私たちのなかには、これらを自らの行為において体験した人はいない。その部分で、まさに「へ考える」という段階であつたと思う。産の周辺を探っていくと、当然、多くの錯綜した構図につきあたる。今回は、そのあたりまでを深く考察することはできなかった。だが、今回、インタビューと私信とによってかいた「自宅出産」は、そうした意味での問題の複雑さを私たちに提起したものであると思う。

出産には、生命の危険性ということが常に回避しえなくある。「自宅出産」の

多くは、仲間たちの中で行なわれているようであるが、技術的な意味でも助産婦にあたるような人がいるのかどうか、あるいは、妊娠・出産をとおして、適切な方法がとられているのか、また、急を要する場合に、助産所等との関わりが、実際にどうであるのか、そうしたことが最も心にかかったことである。病院出産の過剰な人工的操作や薬剤、非人間的扱いを私たちは決して望まないが、それと同時に

あこらミニのミニあこら

『お産の学校』を編集して

BOC 出版部

「産婆の学校」の記録集を出してほしいと頼まれたのがきっかけで、三森孔子さんと「産婆の学校」の自宅分娩の運動にのめりこみ、このほどやっと編集を終えた。この編集の過程で、私たちは、女生の中でのお産の意味を改めて問い直し、あるべき出産が一日も早く実現することを深く願わずにはいられなかった。

この号でも自宅分娩の記録が紹介されているが、元来自宅分娩の運動は、人間の生命の尊重に始まっており、それは科学と専門的技術によつていつそう確かなものになることは軽視してはなるまい。

出産の意味を考えていくうえで、「お産の学校」は、ぜひ読んでいただきたい本である。B6判四四〇ページ、千五百円、各拠点または書店にお申し込みを、

に、かつての自宅出産の時代に、どれほど多くの母子の生命が失なわれていったかをみると、やはり「自宅出産」は、とらえなおしてみると問題を含んでいるのではないだろうか。

■今後の課題として

地域的なことや経済的なことを含めて、適切な産院施設のないことが、望ましい病院出産を余儀なくさせられたり、

また一方では、あえて自宅出産を決意したりといった今日的な産の姿に、女の置かれた状況の二重性と矛盾をみるのである。

今後の課題として、現在の病院出産のありかたが望ましくないと考えるのなら、女が安心して出産できるような、社会的な、あるいは医学的な条件を、どのように整えていくのかを、私たちは考えていなくてはならないと思う。

へあこら浦和く一月から

正式発足 ぶいんぷろくく

へあこら北東京のなかから、もう一つ、浦和あたりに拠点を作りたいという話でたことは「北東京」編集の、「ミニ」35号の座談会のなかでお知らせ済みですが、予想外にはよくとんとん拍子にへあこら浦和へ発足のはこびとなりました。

十二月九日(日)、へあこら浦和へ忘年会兼発足会が開かれ、へ浦和へ設立メンバーと「北東京」のメンバーが集まり、これからは、親戚のような関係で、行ったり来たりしながら、それぞれやっていきましよう、意気投合。まだしばらくは、へ浦和とへ北東京をかけ持つという、バイタリティあふれる人も何人かおり、まずまずのスタートを切ったことをご報告いたします。

連絡先は8ページに記載。

へあこら大阪へ呼びかけ中

大阪にも拠点を、と、遠藤由美さん、藤井里子さんが呼びかけ中です。共に語り合いたい方、ご連絡を！

編集兼営業担当者1名

BOCで社員募集中

「あこら」の発行元、BOCで正職員を募集しています。BOCは女だけで運営しているミニ企業。仕事はきびしく、報酬は大企業とは格差がありますが、ご希望の方は、自己紹介文(千字以内)と作文(私はなぜBOCで働きたいか千字以内)を一月三十一日までに下記にお送りください。面接日をご連絡します。年齢学歴を問いませんが、女性で、へあこら会員、または会員の推せんのある方に限ります。

〒160 東京都新宿区新宿1の9の6

BOC「採用係」

天皇制・女

—天皇「罪位」50年を問う—

編集 婦人民主クラブ
天皇訪米の意味するもの……針生 一郎
教育そ天皇制……村田 栄一
わたしの内なる天皇制……もろさわようこ
天皇制差別の底辺から……宮沢志津子
あなたの中に天皇はいないか……朴 寿 南
350円 千120円

女の老い

編集 婦人民主クラブ

高齢化社会がやってくる。私たちがこの問題をどう受けとめるか。年金を現行の積立方式から賦課方式に切りかえさせよう。五万円を獲得しよう。男社会の中で女としての生きがいを探ることから出発した第一集です。

150円 千140円

私たちをとりまく公害

—婦人民主クラブ活動年表—

編集 婦人民主クラブ公害部
婦人民主クラブは1946年廃墟の中に生れ同時に婦人民主新聞を33年間継続して刊行しています。その中から私たちの反公害運動や記事を年表としてまとめました。

300円 千140円

婦人民主クラブ

東京都渋谷区神宮前3-31-18 ☎(402) 3244
振替東京8-196455

〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会	場
1月10日(木)	15:00~17:00	ヨガ教室 (入会金 5,000円 講習料 1か月 4,000円)〈独身婦人連盟〉 (問い合わせ 03-308-6187 平松、昼の部は毎週木曜日 月4回)		すぺーす JORA	03-203-6022
	18:30~	刑法改悪に反対する婦人会議・定例会 (毎木曜日)		ジョキ	03-357-9565
11日(金)	18:00~20:00	ヨガ教室 〈独身婦人連盟〉(8日(火)が変更して)		すぺーす JORA	
	18:00~	私たちの男女雇用平等法をつくる会・運営委員会		ジョキ	
	18:30~21:30	あごら21号編集会議		あごら読書室	03-354-3941
12日(土)	19:00~21:00	女と男の井戸端会議 〈ホビット村学校〉 (毎月第二土曜日)		ホビット村	03-332-1187
13日(日)	15:00~18:00	インターナショナル・フェミニスト・オブ・ジャパン 月例会 (問い合わせ 03-202-1812)		ノア	011-511-1377
	18:30~21:00	あごら札幌・例会			
	14:00~16:00	国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会 離婚分科会		ジョキ	
14日(月)	18:30~	鉄連の7人とともに性による仕事差別、賃金差別と闘う会・運営委員会 (毎月 第2、第4月曜日)		〃	
15日(火)	18:00~20:00	ヨガ教室 〈独身婦人連盟〉 (夜の部は毎週火曜日、月4日)		すぺーす JORA	
16日(水)	18:30~	働く女性の相談室 〈行動する会・労働分科会〉 (毎水曜日、予約は毎日)		ジョキ	
17日(木)	18:00~	私たちの男女雇用平等法をつくる会 会報グループ・集まり		〃	
	18:30~	鉄連の7人とともに闘う会・学習会 (毎第3木曜日)		〃	
19日(土)	13:30~16:30	「海外の女性と家庭生活」 報告 樋口恵子氏 〈家庭科の男女共修をすすめる会〉		婦選会館	03-370-0238
	19:30~22:30	女のパーティー 〈ラベンダーギャングズ〉		すぺーす JORA	
20日(日)	13:30~17:00	「あごらミニ12月号とあごら21号の合評会」 〈あごら京都・例会〉		シャンバラ	075-821-3579
	14:00~16:00	「年間行動計画について」 〈あごら九州・例会〉		福岡市立婦人会館	092-712-2662
23日(水)	18:00~	私たちの男女雇用平等法をつくる会・運営委員会		ジョキ	
24日(木)	10:00~12:30	あごら東海・例会		名古屋市立婦人会館	052-331-5288
26日(土)	18:30~21:00	「年間活動計画について」 〈あごら九州・例会〉		福岡市立婦人会館	
27日(日)	13:00~16:00	『女性学入門(富士谷あつ子編著)』をめぐって 講師 大利一雄(桃山学院大助教授) 〈日本女性学研究会・月例会〉		楽友会館	
29日(火)	18:00~20:30	「東京都における女子離職者の生活実態」 講師 塩田咲子(東京都立労働研究所員) 〈婦人労働研究会 03-434-5860〉		日本労働協会労働教室	03-436-0151
30日(水)	19:00~	あごら北東京・例会		婦人協同法律事務所	03-985-3308
2月2日(土)	13:30~16:30	「Uターン禁止!『福祉の切り捨て』『家庭に帰れ』は許さない!」 お話 樋口恵子さん(評論家) 〈行動する会・定例会〉		渋谷労働福祉会館	03-462-2511
	14:00~16:30	あごら武蔵野2周年記念講演会「80年代に向けて 女性の生き方」 講師 松井やより 〈あごら武蔵野〉		東村山福祉センター	
16日(土)	19:30~22:30	女のパーティー 〈ラベンダーギャングズ〉		すぺーす JORA	
18日(月)	18:00~22:30	「婦人の財産権」 講師 井田恵子(弁護士) 〈婦人労働研究会〉		日本労働協会労働教室	
24日(日)	13:00~16:00	「主婦論再考」 〈日本女性学研究会・経済分科会研究報告会〉		京大館	

〔編集後記〕母と子の生命を真に尊重し、女・男・子の主体的な関係を築いていくために私たちが目ざす出産の形は? 一人の女が選ぶ(選ばされる)出産形態の背後に、複雑にからみあった社会の問題状況があることを改めて深く気づかせられます。いろいろな状況でのいろいろな意見があることでしよう。様々な論を展開し共通認識を広げていく一つのきっかけになれば幸いです。今年もお互いにかんばりましょう! (山口)

あごら旭川	旭川市神楽岡一条五丁目3 田代慶子
あごら札幌	札幌市中央区南25西12 ニュー藻岩503 高橋芳恵
あごら浦和	埼玉県浦和市南浦和2-19-8 国井マツ江
あごら北東京	川口市芝北町34-13 宗久知恵子
あごら武蔵野	小平市小川町1-76-3 丹羽雅代
あごら京王	府中市晴見町3-21 関和子
あごら神奈川	川崎市多摩区生田4-6-3 沼田千恵子
あごら東海	愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12 伊藤汎美
あごら京都	京都市左京区北白川久保田町36 塚崎美和子
あごら阪神	尼崎市武庫之荘3-6-6 木沢みすず
あごら九州	福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子

各地のあごら連絡先